

下野市立薬師寺小学校

1 学校課題

協調し、学び合う授業の創造 ～「学び合い」が生まれる授業の実践と協調学習を目指して～

2 研究計画

(1) 研究の方針

- ① 「学び合い」を追究し、児童が学びの手応えを感じる授業作り。
 - ・一斉授業中心から協同的な学びの導入。(教師は知識の伝達から授業のファシリテーターに)
 - ・児童の「学び」(自分との対話、友達との対話、モノとの対話をすることで成熟する)を生み出す。
 - ・教室に「聴き合う関わり」を形成する。(学び合う関わり作り)
- ② 教師の専門家としての授業力(授業、授業準備、教材研究、研修)の向上。
 - ・教師が自分の授業を開き、全ての教師が研究を共有する。(協同的な学び)
 - ・うまい授業を作るのではなく、一人一人の学びを実現し保障することに重きを置く。
 - ・授業検討会の充実により、授業研究の真の深まりを期待する。(振り返り)
 - ・各個人の研究テーマを設定し、個人研究を進める。
- ③ 「学び合い」を高める協調学習の研究と実践。
 - ・多様な考え方を生かす学習の在り方(協調学習)を研究する。
 - ・「知識構成型ジグソー法」で授業の質を高める。
 - ・「パフォーマンス評価とルーブリック」を研究実践し「学び」の評価を高める。

3 研究内容

(1) 研究の方法

- ① 個人研究を進める。

年間を通じて1人1研究を実践する。テーマは自由として、個々の教員が教育のプロとして自分の資質を高め、教育の専門性を高める目的で自由に設定し、1年間追究する。
- ② 研究授業の質を高める。

原則として研究授業公開は、1人1回実施する。「学び合いを高める」ことを前提に、協調学習の研究をし、知識構成型ジグソー法を取り入れ授業実践を行う。
- ③ 授業検討会を充実させる。

授業検討会はS&Uコラボ事業を活用し、外部指導者(大学教授)の指導を受け学びの質を高める。検討会の方法は、各コーディネート学年が工夫し、更に少人数での話し合いを取り入れ、教職5年未満の先生が発言できる雰囲気作りを心掛けた。またKJ法などを取り入れ、振り返りを重視する。

(2) 研究の実際

① 実践研究授業

教員は年間一回授業を公開することを基本に研究授業を実践し、S&Uコラボ事業として宇都宮大学の教授、市教委指導主事の先生に直接指導を受けるとともに授業を開くことで学校全体の学びを深める。



② 実践内容

日時	形態	授業者	教科	授業内容	学年
4/8(水)	校内研修	学校課題研修		テーマ設定と個人テーマ決定	
5/13(水)	校内研修	学校課題研修		本年度の重点検討会	
6/10(水)	校内研修	学校課題研修		本年度の提案に対する研修	

7/1(水)	要請訪問	川島 啓	算数	「速さ」 提案授業、検討会、本年度の重点	6年
8/28(金)	校内研修	個人テーマ研究 中間発表			
9/2(水)		赤坂 真希	人権	「バングラデシュから来たシャボン君」	4年
		白石 孝子	音楽	「音楽のききどころ」	6年
9/11(金)	S&U事業	林 麻子	算数	「平均」	5年
		川島 啓	算数	「円の面積」	6年
10/13(火)	学力向上研修	園部 幸男	算数	「小数のしくみとたし算、ひき算」	4年
10/21(水)	校内研修	芋川 晴恵	算数	「かけ算」	2年
10/28(水)	S&U事業	田崎 里佳	算数	「かけ算」	2年
		赤坂 真希	算数	「垂直、平行と四角形」	4年
11/20(金)	校内研修	矢岡千比呂	算数	「引き算」	1年
11/25(水)	S&U事業 要請訪問	北城 篤史	算数	「割合」	5年
		野口 貴史	算数	「比」	6年
11/26(木)	校内研修	稲葉 恵子	算数	「引き算」	1年
12/8(火)	学力向上研修	宮本 元与	国語	「姿を変える大豆」	3年
1/20(水)	校内研修	研修の振り返り 研究の反省			
2/3(水)	校内研修	研究のまとめ 次年度の計画案			

4 本年度の成果と課題

(1) 研究の成果

- ① 協調学習の追究では、知識構成型ジグソー法の展開により、より深い「学び」が実現した。その結果、児童の学びに向かう雰囲気が高まり、共に協調して学んでいこうとする姿が児童の意欲や態度に表れ、学びの質の向上が見られた。
- ② 「教師の専門家としての向上」への取組では、研究同人である教員の意欲が向上し、果敢に協力学習にチャレンジする姿勢が見られた。特に知識構成型ジグソー法の展開では、課題を浮き彫りにする取組が見られ、時間外での勉強会が発足するなど前向きな取組であった。また、S&Uコラボ事業による、大学の先生からの指導は、常に核心に迫った適切なアドバイスがあり、さらに我々を元気にしてくれる助言がありがたかった。



- ③ 本年度の新たな研究内容であるパフォーマンス評価とルーブリックの導入では、パフォーマンス評価という難しい課題に対して、積極的なアプローチが見られた。またルーブリックの作成は悪戦苦闘と検討の繰り返しであったが、協調学習における評価の重要性、ルーブリックによる評価内容と基準の見直しという新たな視点を我々にもたらした。

(2) 研究の課題

- ① 昨年度に引き続き実践した協調学習は、知識構成型ジグソー法という一つの型を通じて研究することで、その有効性について十分な成果を得られた。しかしこの方法は、丁寧に実践すればするほどより多くの時間が必要となることに気付いた。また、形ばかりのジグソー活動は、児童に必要感が生まれず、学びの深まりが見られなかった。今後は児童に必要感のある、課題の提示やエキスパート活動が課題である。



- ② 協調学習の追究は授業の質を高めるものとなり、同時に教師の同僚性の高まりをもたらしたが、授業検討会のマンネリ化、短時間での授業検討は十分な授業検証とは至らなかった。どこか不完全燃焼の状態、せつかくの提案授業者が納得できないまま、次の実践に向かっていく様子が見られた。今後は一つ一つの実践を丁寧に検証する、時と場が必要である。是非来年度に生かしていきたい。